

---

# 棺のクロエ1.5 花嫁強奪

義忠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

棺のクロエ1・5 花嫁強奪

### 【Nコード】

N1130Z

### 【作者名】

義忠

### 【あらすじ】

<帝国>の隣国<王国>の王女フェリアの結婚式が華やかに催されんとしたその直前、ヒュー・タム少佐は会場から彼女を連れ去った。<王国>親衛隊による王女暗殺を阻止するためと告げる少佐だったが、雪の山岳地帯を越えて<帝国>領へと脱出せんとする二人に追手が迫る 雪の山岳地帯を舞台に繰り広げられる機械幻想の  
マシーナリイ・ファンタジー  
外伝！

かれこれもう百年以上も歴代の王家の花嫁を見守り続けてきたという、壮麗な造りの鏡台に、憂いを帯びた女の貌かおが映っていた。

帝都　の最新モードを基調に民族調に編み上げられたレースを組み合わせた、真つ白なウェディングドレス。きらびやかな宝石をちらばめた由緒正しきティアラ。普段は短めの亜麻色の髪は、付け毛ウィッグで肩から下まで伸ばされ、絶妙な膨らみを帯びて腰まで流れる。そして、王都　でもいちにを競うアーティストのメイク　いずれも、王家の娘の婚禮にはまずもって充分な気品と豪華さ。

女として生まれて、一世一代の晴れの日を迎えたこの日に、鏡の中の彼女に何を憂うことがあるのか　フェリアはどこかまるで他人事のように、鏡に向かってそんなことを考えていた。

マリッジ・ブル  
「花嫁の憂鬱」？

ああ、そうかもしれない。この土壇場になって、底知れぬバカバカしさに捉われているこの感情をそう呼ぶのなら。もっとも、世のすべての花嫁がこんな虚無感を抱いて嫁ぐのだとも思わないけれど。一〇代でスキーと乗馬の国際大会の選手に選ばれ、その後も　帝国　への留学中には　帝国　皇族と浮名を流し、帰国後もスポーツや芸術の積極的な後援者として振る舞って、自身も登山やドライブなどを好む「開かれた王室」の象徴たる行動派王女　そうした国民に流布する華やかな自分のパブリック・イメージの裏側で、大樹を内側から侵食するウロのように、ぼつかりと開いた空洞が広がってすべてを呑み込もうとしている。

花婿が気に入らない、というのではない。むしろそこはどうでもいい。王室官房の役人達が、数年掛かりで見つけ出してきた相手に文句があるわけではないのだ。「王室を軸とする国家和合」なる崇高な企画コンセプトに則って、膨大な量の報告書と企画書と比較分析表の洪水に、無限に続くかに思えた審議会と非公式の根回しの果

てに浮かび上つてきた花婿候補に、たとえ当事者といえど異を唱えられるわけもない。

無論、「王女様のワガママ」で面子を潰される政財官学の錚々たる顔触れなぞどうでもいいが、しかしそうまでして通したい我があるわけでもない。

そうやってただ流されるままに状況に流されて、いよいよ式を迎えるこの段になって、己の中身がかくもからつぽの伽藍堂だったのだといよいよ気付かされた自分が今ここにいる。

いや、ずいぶんと酷い話だと、我ながら思う。こんな抜け殻のような女を娶る花婿に、我がことながら同情を禁じ得ない　まあ、そんなことを考えている時点で、既に他人事に近いのだが。

得体の知れない不快感が沸き起こってくる　それが誰の、何に對する不快感なのか自分でもよく判らない。

「……『高貴なる者の義務』、だつたかしら……」

今はここにはいない男の言葉を呟き、ようやく口許を小さく綻ばせることができた。まったく、便利な言葉だわ。いろいろなものに蓋をすることができる。あの時、彼が口にした時には、もう少しましなニュアンスで使われていた言葉だったような気がするけれど。でも、それとても、もうよく思い出せない。どうしても焦点の合わない映写幕を眺めるように、何もかもが遠く、遠く、霞の彼方に在り続けている。

そこへ目を凝らすでもなく、手を伸ばすでもなく、立ち去ることもできず、嫁ぐ自分にも現実感を欠いたまま、フェアリアは鏡の向この自分をただぼんやりと眺め続けていた。

そこへ不意にノックの音が聴こえ、我に還った。  
式典の関係者かしら。時間はまだあるはずだけだ。

もういちどノック音　やむなく、鏡台の前から立ち上がり、ドアへと向かう。メイクが終わってから、しばらく独りになりたい、と半ば強引に人払いをしまったために、この控え室にはフェアリアひとりしかない。

分厚いドアを開けると、細身の眼鏡を掛けた礼装姿の儀仗兵が立っていた。

長身の儀仗兵は白手袋を嵌めた右手で帽子のつばをわずかにずらし、眼鏡のグラス越しに細めた黒い瞳でこちらを見下ろしている。端正ではあるものの、どこか岩塊から荒つぽく削り出されたような凄みの貌立ち<sup>かお</sup>。王室への敬意のあらわれというにはあまりにも不遜窮まる形に口許がわずかに歪む。その微笑と、眼鏡の下から槍の穂先のような鋭さで投げ掛けられる眼光とのギャップに奇妙な威圧感を感じて、フェリアは小さく息を呑みこんだ。

儀仗兵は短く訊ねた。

「フェリア王女殿下？」

「……何事ですか……？」

王国の人間なら見間違えるはずもない自分の顔を見て、何故、あえて名を訊く？ 疑念を口にするより先に、儀仗兵はふてぶてしく破顔する。

「結構 急いでください。ここを出ます」

「……？ あなた、何を言って」

訊き返しながら、ふと儀仗兵の足許へ視線を落とす。そこにできた血溜まりの中に、濡れた男の腕が転がっていることに気付いて、小さく悲鳴を上げる。

「！？」

とつさにドアを閉めようとしたそこへ、男は軍刀<sup>サーベル</sup>の柄を突き出してきた。ドアの隙間にねじ込んだその柄を使ってそのまま強引にドアをこじ開けると、室内に押し入ってくる。

「失礼。時間がありません。命が惜しければ、言うとおりにしてください」

凄みのある笑みで告げる男の言葉に、フェリアは頷くしかなかった。

帝国 北方外縁に連なる諸国の中でも、比較的長い歴史と大きな国力を有する 王国。その 王都 にあつて、鎮護国家の要<sup>かなめ</sup>として、王宮と向かい合うように聳<sup>そび</sup>える尖塔で人々に親しまれている大聖堂の一室 今日この婚礼式典では花嫁の控えの間とされたその部屋はもぬけの殻と化し、対照的にその前の廊下と壁面には大量の血がぶち撒けられて、床の上には幾つかの屍体が転がっている。王室親衛隊長であるクトル・コープ少将は、冷やかにその惨状を眺めた。

射殺された警備兵の屍体が二、消音器付きの短機関銃<sup>SMG</sup>を手にした儀仗兵の屍体が二 こちらはいずれも一太刀で斬殺されている。將軍は足許の屍体から短機関銃<sup>SMG</sup>を拾い上げ、装捍<sup>コッキングハンドル</sup>を半ばまで引いて薬室<sup>チェンバー</sup>に銃弾が装填されていることを確認した。

「將軍！」

派手なフラッシュを焚いて現場撮影を行っている部下に場所を譲った少将の禿頭の後頭部へ、背後から張りのあるバリトンの大声で呼び掛けられた。

振り返れば、秘書を引き連れた白いタキシード姿の大柄な壮年の男がつかつかと駆け寄ってくる。

「私の花嫁はどこだ!？」

「奪われました」

「何だと!？」

醒めきつた表情で返す少将の言葉に、花婿であるはずのエラン・マキナスは驚愕<sup>かお</sup>で貌<sup>かお</sup>を歪めた。若手ながらも市民議会の実力派議員として知られ、将来の宰相候補とも目されてもいるエラン・マキナスは、獅子にも喩<sup>たと</sup>えられるその貌<sup>かお</sup>を少将に寄せて小さく囁いた。

「まだ生きてるのか!？」

「帝国 の工作員に薄皮一枚で先手を取られました」

「帝国 に知られてるだど？」

「想定範囲内です。若干のシナリオ変更で充分に対処可能でしょう」

淡々と応える少将に、エラン・マキナスは念を押すように訊いた。  
「大丈夫なんだな？」

「無論です」

「……後は、私が花嫁を奪われた間抜けな花婿の屈辱に耐えればいい、ということか」

「その問題も、この場で片づけましょう」

「何？」

振り返る胸元に少将は短機関銃S M Gの銃弾を叩き込んだ。

エラン・マキナスの大柄な体躯が、悲鳴も上げずにその場で床にひっくり返る。表情ひとつ変えず、少将はその頭部へ続けてとどめの銃撃を加えた。

それを見ても、周囲の兵士たちに動揺はない。すべて既定の出来事のように、誰も姿勢を崩さない。

唯一の例外として、ひいつ、と悲鳴を上げた秘書が、踵を返して走り出す。

と、その横を軍用コートを羽織った長い銀髪の士官がすれ違う。

その刹那、コートの裾がわずかに翻り、腰の軍刀サーベルから糸のような銀光が空間を縫い走る。次の瞬間、秘書は袈裟掛けに斬り捨てられ、周囲の壁面に大量の血を撒き散らしながら床へと転がり崩れた。

それを振り向きもせずに無視し、男は少将の前で立ち留って敬礼する。

「遅いぞ。シラン大尉」

「申し訳ありません、將軍」

低い掠れ声で応える土気色の肌の大尉に、少将は床の屍体へ顎をしゃくる。大尉は無言で腰を落とすと、斬殺された儀仗兵の鋭利な傷口へ指を添えた。

「例の片腕機人の 帝国 軍人だな？」

「間違いありません」

頷く大尉へ、少将は吐き捨てるように訊ねた。

「貴官から『死んだ』と報告を受けたのは、つい昨夜の話だぞ」

「遺体は見つかってません。どうやら生きていたようですね」

悪びれもせずに大尉が視線を返す。幽鬼のような落ち窪んだその両目に、少将は小さく眉を顰めただけでそれ以上咎めず、告げた。

「奴は王女を連れて逃げた。おそらく国境を越え、帝国軍部隊と合流するつもりだろう。貴官ならどう動く？」

「クトラ口からキエ山脈を越えます」

「女連れの足で冬の雪山越え、か？」

「姫様単独では無理です。しかし、経験者がそばについて、無理をさせれば可能でしょう」

「……………」

少将はぎょろりとした大きな眼で大尉を見据えた。

「王女の身柄を帝国に押さえられて、連中にいいように使われるわけにはいかん。少なくとも、生きていると知れただけでも、様子見を気取る軍部の動揺を招きかねん」

「承知しています」

「よし。国境警備隊にいる同志に手配して、手だれの部隊を廻してやる。追って、必ず仕留めてこい。ふたりとも、な」

「御意」

頷く大尉の双眸の奥で、冷たい光が炎のように揺らめいた。



## 1（後書き）

『棺のクロエ』外伝です。

今回のお話は既に発表済みの『棺のクロエ1&2』のちょうど間の時期の出来事で、少佐主役の番外編。「棺」もどっちのクロエも出てきません。二人のクロエ達の冒険とは別に、こんな世界もあるんですよ、ということ。

今回は事件発生の第1話に、事件の背景を一気に語る第2話まで同時に掲載します。

引き続き、第2話をお楽しみください。

「もう一度、先ほどのニュースを繰り返します。」

先ほど午前一時過ぎ、王都の大聖堂にて開催されようとしておりましたフェリア王女殿下とエラン・マキナス氏の婚礼会場を何者かが襲撃し、新郎新婦のおふたりを殺害して逃走しました。

また国王陛下、皇后陛下、皇太子殿下を始めとした王族の皆様方を始めとした列席者は、会場を警護する親衛隊によって保護され、全員、無事に現地に留まっているとのことでした。

これを受けて首都民警本部と親衛隊本営は、共同で王都全域の戒厳令の布告を宣言。市民の一時外出禁止を宣言しました。

市民の皆様は無用の外出を避け、外出禁止令が解除されるまでくれぐれもご自宅から出ないように。」

「おやおや、死んだことにされてますよ、貴女」

「……………」

「それと、よく聞くといろいろおかしい放送ですね。お国では、戒厳令って、首相や国王以外でも勝手に布告していいんですか？」

「……………少し黙っててくださいませんか」

フェリアは助手席から、運転席でステアリングを握る眼鏡の男を睨みつけた。つい先ほどまで儀仗兵姿で軍刀をぶら下げていた男は、洒落た高級スーツ姿に着替え、何事もなかったかのような表情でスポーツカーの運転席に納まっている。ポマードできれいに撫でつけた総髪頭<sup>オールバック</sup>に細身の眼鏡。それが度の入っていない伊達眼鏡であることに気付いたのは、車に乗せられてからだ。とが相俟って、ぱつと見、売り出し中の新興財閥の青年実業家といった風情の格好だった。

一方のフェリアもウェディングドレスから、スポーティーなパンツルックに着替えさせられている。大聖堂内の別室に連れ込まれ、これに着替えるように押しつけられたのだ。付け毛やアクセサリー

の類はその場で捨てさせられた。さすがにメイクを落とす暇はなく、代わりに大きめの鳥打帽<sup>キャスケット</sup>とサングラスを渡された。これで誤魔化せ、ということらしい。

いやらしいことにサイズも趣味もぴったりだったが、文句を言う間も与えられなかった。そのまま事件発覚で騒然となる大聖堂をぬけぬけと正面入口から出て、VIP用駐車場に停めてあったこの王国 製高級スポーツカーに乗り込むと、駐車場を封鎖していた親衛隊兵士を親衛隊長コープ少将の署名の入った命令書 どうせ、偽物に違いないのだが と舌先三寸で丸めこんで突破。事態に氣付いて慌てて集まってきた兵士達が発砲するのを尻目に、フェリアを連れてあっさりと現場からの離脱に成功してしまった。

まるで魔術師のような というより、質<sup>たち</sup>の悪い詐欺師のような鮮やかな手際だった。

その後、こうして郊外へと繋がる幹線道路上をアクセルべた踏みで疾走しているという次第なのだった。

結局、この男は何者なのか。

帝国 軍人で、自分を救いに来たと口にしていたような気もするが、警備兵達の屍体を見て以来、思考停止状態で言われるままにここまで来てしまった。

いや、もしかして と言うか、かなりの確率で、自分はただ単にこの男に誘拐されただけなのでは……？

轟々と音を立てて血の氣が引いてゆくフェリアの横で、男は何が面白いのか口許を緩ませて言った。

「いや、失礼。とりあえずこの分だとラジオ局は押さえられたようですね。さっきからの局でも同じ内容だ」

「……クーデター……？」

男が頷く いや、そんなに軽々しく頷かれても困るのだが。

「誰が、何で いいえ、それより貴方、何者なの？」

「……さっき説明しませんでしたか？」

「聞いてません」

即答する。聞いたかもしれないが、それどころではなかった。  
記憶にはまったく残っていない。従って、フェリアとしてはウソは  
言っていない。

男は苦笑し、改めて自己紹介を始めた。

「私は 帝国 陸軍のヒュー・タム少佐です」

「 帝国 のスパイ？」

「一応、正式に武官としての届けは出しておりますが」

「判るわけないでしょ。 帝国 おたく の大使館には1、000人以上勤  
めてるのよ」

「まあ、どうせ大使館にはろくに顔を出してませんから」

……そこはかとなく、物言いが勘に障るのは何故だろう？

「それで、 帝国 の軍人が何で私を誘拐するんですか？」

「誘拐じゃない、という話も二度目ですけどね」

「聞いてません」

再度、即答する。

「なるほど」少佐は肩をすくめて頷いた。

「ならば改めてご説明します。」

私達 帝国 の情報網が、結婚式典会場での貴女の殺害と、参列  
アンテナ  
客の拘束、それと並行して 王都 に戒厳令を布告して国権を篡奪  
せんとする勢力の存在を察知しました」

「……誰が、そんなことを？」

蒼褪めた表情で訊ねるフェリアに、少佐はあっさりと首謀者の名  
を口にした。

「王室親衛隊長クタル・コープ少将」

「バカな つー？」

「後は、内務省と国境警備隊の一部 軍は 帝国 留学組に枢要  
を押さえられてますから、避けたようですね」

「何で、そんなことが判るんです！？」

「仕掛けた本人から直接話を聞きましたから」  
しれっと少佐が言い放つ。

「??」

「同盟 ディスタピライズ・オフィサー の不安定化工作要員がお国に潜り込んでいたんですよ。

そいつが 王国 国内の反 帝国 勢力を煽って事に及ばせた」

「反 帝国 勢力……って、そんなものこの国にはありません!」

「これまではね。ただし、気分として反 帝国 の空気はあった。

この前の戦争ではお国からも数十万の出兵をして、未帰還兵も数万人規模で出ている。身近に未帰還兵や傷病兵を出した国民の中には、潜在的な 帝国 への反感を抱いている者も少なくない」

そういえば、コープ少将の三人の息子はいずれも 帝国 と 同盟 の戦争に出征し、戦死している。その心労からか戦後すぐに妻も亡くしている。フェリアもその葬儀に参加して、外遊中だった父王の弔文を直接伝える役目を果たしている。

「待って。だからって、それがこんな叛乱騒ぎに直結するなんて、話が短絡過ぎます。我が国の経済が 帝国 との密接な関係で成りたっていることくらい、子供だって知ってるわ」

帝国 本土の北方から西方辺境領に至るまで、長大な地域に横たわるキエ山脈 その山岳地帯に分断されて存在する群小の北方諸国家群。その中でも盟主的な位置づけで存在する 王国 は、北方諸国群各地からの農産物や木材、鉱物資源などの一次産品を使って、食品や木工家具などの加工品、鉄鋼、アルミなどの工業資材、さらには時計から自動車、航空機にまで至る多種多様な工業製品を造り、帝国 圏へ輸出して経済を発展させてきた。

それを可能としたのは、ひとつは複雑を極める北方諸国間の利害関係 ハートランド を精妙に調整し、中原の歴代政権と彼等とを政治・経済・軍事の各側面で結びつけてきた優れた外交能力。それと、中原で政変 ハートランド が起きるたびに乱を嫌って逃げ出した学者や技術者を多く受け入れてきたことによつて、高度な工業技術産業を育くんでいていたことなどが挙げられる。

実際に先の大戦では、近代戦で生じた巨大な資材消費に加え、総力戦規模の大規模動員によつて生じた 帝国 の著しい生産力不足

を 王国 は充分以上に補つてのけた。トイレットペーパーのような生活消費財から、自動拳銃や小銃のような小火器、戦車、大砲、航空機や飛行艦用エンジン、果ては海もない内陸国にも関わらず潜水艦用の機関まで輸出し、 帝国 の戦争を側面から支えきつたのである。

勿論、戦後の復興にも 王国 からの資材産品や工業機械は欠かせない。こうして少佐がステアリングを握る 王国 製スポーツカーも、順調に回復しつつある 帝国 経済の旺盛な個人需要を満たすため、増産に増産を重ねている。

もつとも、逆に言えば 王国 の旺盛な生産力を受け留められる市場は、 帝国 以外にない。

事実、戦争を通じて 王国 は膨大な貿易黒字を溜め込んだが、国内の産業力基盤の整備や製造業の設備投資に使われた以外は、そのほとんどは戦時外債などを通じて 帝国 本土に還流している。

帝国 との力関係で強いられた面もあるが、 王国 国内では他に使い道がなかったからという方が理由としては大きい。人口三、〇〇〇万強の 王国 に、たとえ周辺の北方諸国を数に入れても人口も市場規模もたかが知れており、個人の消費需要にも限界がある。そこに無理やり資金を流し込んででも実体の伴わないバブル経済となつてしまい、長い目で見れば市場や人心を傷めつける結果にしかない。

かと言って、規模として 帝国 圏に匹敵する 同盟 圏は、市場として遠すぎた。内陸の 王国 から商品を輸出するには 帝国 圏を通過するしかない。またビジネス上のトラブルが発生しても、同盟 圏での 王国 単独での影響力など知れたものだから、どうしても商売は不利にならざる得ない。 王国 が 帝国 経済に影響されない独自の商圈を確立したくても、一朝一夕で出来る話ではないのだ。

つまり 王国 の経済は、完全に 帝国 経済に組み込まれる形で成立しているのだ。それは国民の誰もが身に染みて理解する厳然

たる事実だ。

なればこそ、 帝国 からの出兵要請にさほどの反発もなく応え、戦後も多少の不満はあれ明確な反 帝国 運動のようなものもなかった。

しかし

「だからと言って、傷つかなかったわけじゃない」

「……………」

少佐の指摘に、フェリアは小さく眉を顰めた。細身のナイフをそっと刺し込まれたような感覚を胸に覚える。

その痛みの意味から目を逸らすように、フェリアは視線を車外へと向けた。道はいつしか川幅の広い河川沿いの道に入っている。河の兩岸は氷河に削られた切り立った崖からなり、そこにうねうねと曲がりくねった二車線道路が張り付いていた。戒厳令の影響か、行き交う車もほとんどなく、遠くの川面を喫水線の低い運河船カナルクルーザーが浮かんでいるのみだ。法定速度を完璧に無視して突っ走るスポーツカーを見咎める者はいない。

空は低く灰色の雲が立ち込め、いつ雪に変わってもおかしくない雰囲気だった。この時期の 王国 の天候としては珍しくもない天気だったが、だからといって慰めを見出せる空模様とは言い難い。

フェリアの動揺を知ってか知らずか、少佐は告げた。

「だからこそ、感情の持って行き場が見つからず、鬱屈していた。そこを付けこまれたんですよ」

「……酷い言い方をするのね」

「世の中は善人ばかりではありませんから」

フェリアは苦い吐息を洩らしてから、少佐の横顔を睨みつけた。

「それで、クーデターで親 同盟 政権でも作ろうっていうんですか？」

「まさか」少佐は苦笑して応えた。

「ただの不安定化工作ですよ」  
ディスタビリゼイズ・オペレーション

「不安定化……何ですって？」  
ディスタビリゼイズ

「不安定化工作 叛乱や暴動、社会不安につながるありとあらゆる人為的工作、そのすべてです」

フェリアは眉間を押さえつつ反論した。

「待ちなさい。 帝国 と 同盟 はつい先日も停戦条約延長で合意したばかりだし、通商条約復活の協議も進んでいると聞いています。我が国とも、 帝国 外務当局との協調下で、水面下での接触も始まっているわ。こんなタイミングで、そんな何もかも台なしにしかない真似」

「ああ、そこはちょっと違うんですよ。」

同盟 政府は確かに 帝国 との和平を望んでいる。機械化率が高く正面装備に金の掛かる対 帝国 の兵力を削減し、国内の経済復興や南方のエネルギー資源確保に資金や人材を振り向けたいと考えている。そこに嘘はなくて、それが外交面でのここ最近の平和攻勢につながっている」

「だったら」

「けれど、それだけでは不十分と考えてしまうのが、 同盟 <sup>かれら</sup> の外交や軍事の考え方でしてね」

「……………」

「敵との緊張関係を緩めたければ、敵の意識を他に向けさせればいい そう考えたがる悪い癖がある。だから 同盟 との付き合いは平和な時ほど油断がならないんです。」

で、現実問題として、 王国 を始めとした北方諸国に不安定化されたら、対 同盟 戦略どころの騒ぎではない。そこへ 同盟 から兵力削減の提案をされれば、こちらは乗らざる得なくなる」

「そんなくだらないことで…… 人が何人も死んでるのよ……」  
絶句するフェリアに、少佐はあっさりと言いつつ放った。

「人が死ぬ理由なんて、大概、こんなものですよ」

「……………」

何だ、この男……？

ふてぶてしい微笑を浮かべた男から、不意に冷たく乾ききった空



気を感じて息を呑んだ。フェリアがこれまで出会ってきた軍人達とはどこか違う、暗闇の底を覗きこむような虚無感　何をどうすれば、こんな人間が出来るのだろうか……？

そんな疑念がよぎったものの、フェリアは別のことを訊ねた。

「それで、その　同盟　の工作員は……？」

「帰りましたよ。本国に」

「な……っ！？　何で逃がしたんですか？」

「そういうものだからです。　帝国　も　同盟　でいろいろやりますからね。あのレベルの工作員には互いに手を出さないことになつてゐる」

「そんな　」

「ついでに付け加えると、全部の仕込みが終わった時点で、そいつはすべての情報を手にして投降してきた。無事に本国に帰国することを条件にね。何故だか判りますか？」

「判りません、そんなこと」

「彼の計画には、最終段階での　帝国　軍の介入が折り込まれていたのであります。」

貴女の指摘するように軍事的、経済的に　王国　はいくら足掻こうと　帝国　のくびきから逃れようがない。だが、たとえ結果が同じでも、直接的な軍事制圧が行われてしまえば、　王国　市民の　帝国　への遺恨は数十年単位で後をひく」

「軍事制圧　！？　」フェリアの背筋を冷たい電流が走り抜ける。

「何でいきなり、そこまで話がエスカレートするんです？　コープ

少将がどんな政権を打ち立てようと、　帝国　と　王国　の力関係は明白なのよ。ならば時間を掛けて待てば、いずれ　」

「ああ、問題は、その時間があまりないこととして」

「……………」

「既に報道で流れている話ですから隠し立てはしませんが、　帝国　の陸軍参謀総長の容体があまり芳しくない」

「その話なら、聞いています」

フェリアは頷いた。俗世の権勢のほとんどを軍隊、とりわけ兵数の多い陸軍によって支配されている 帝国 では、陸軍参謀総長は実質的な国家元首と言っている。

「死なない人間はいませんか、それ自体はいつか来る話が今来たというだけに過ぎない。しかし、問題はこの期に及んで後継者が決まっていないことでしてね」

「な……え!？」

さらりと口にされた少佐の台詞に、フェリアは慄然とした。

帝国 陸軍参謀総長の入院は周知の事実でも、後継者の指名もできないほど重篤とは聞いていない。つまり 帝国 の権力中枢は今現在、真空状態だということでもある とんでもない国家機密の漏洩だ。

そんなものを、何故、こんな場所で自分に いや、そもそも事実なのか？ 事実だとして、目の前のこの男は 帝国 のどこの誰の意思決定でここに…… ああ、確かに政治中枢の意思決定などなくとも、出先機関が惰性と脊髄反射で謀略のひとつやふたつやりかかない国ではあるが。

しかし、真実恐ろしいのは、この状況で 王国 はクーデター紛いの状況に突入してしまった、ということだ。

権力中枢の統制を欠いた 帝国 の関係当局が、この状況でどう動くか判らないというだけではない。下手をすると、 帝国 内部の権力抗争に捲き込まれて、国土を蹂躪されかねない いや、既にしてこの状況自体、 帝国 内部で起こっているこの地殻変動の余波ではないとも言いきれない。

大国に隣接する小国の民の本能的な感性として、事態の深刻さをまざまざと理解してフェリアは蒼褪めた。

加えて、それを「今」、「ここで」、「自分相手に」語る、この男の意図は何なのか？

そもそも、目の前のこの男が本当に 帝国 の軍人である保証もない つまり今の自分を取り囲んでいるものに、何ひとつ確かな

ものはないのだ。

「……………」

サイドシートで黙り込むフェリアをよそに、少佐の説明は続く。

「同盟」のその工作員の計算違いは、我が帝国の権力中枢が既にそこまで不安定化していることに理解が至らなかったことです。まあ、ウチの参謀総長の容体はトップシークレットなので無理もありませんが。

そんなわけで、今の帝国に北方諸国の不安定化を許す余地はありません。事を知って、帝国国内では事態を急いで解決しようとする政治的なベクトルが既に動き出しています。早目に手を打って、状況の悪化を防ぐ必要があった」

「……防げてないじゃないですか」

「ごもつとも」少佐は苦笑して頷いた。

「ですが、これでもぎりぎりのところで最悪の事態を避けることに成功してるんです。

連中の計画通りなら、今頃貴女は既に死んでいて、ほどなく国境の向こうで待機している帝国ウチの陸軍空挺部隊パトルーパーが王都上空から舞い降り、国境線を山岳歩兵師団が浸透突破を図って、彼等に確保された回廊に戦車師団が突入するところでした」

少佐の説明は妙に具体的で、実際の軍事作戦の存在をフェリアに確信させた。

「……まるで『戦争』じゃないですか！」

「『戦争』ですよ」少佐は頷いた。

「だから、それを避けるために、貴女を救い出したんです」

「……大まかな状況は判りました。でも、まだ判らないことがふたつあります」

「ひとつは貴女の命が狙われたこと」

「ええ。狙われたのは王族全員ではなくて、『私だけ』なんですネ

？」

「そうです。あえて貴女の死亡報道だけが流れたということは、おそらく他の王族の方々の身柄は無事でしよう」

「よかった……」 フェリアはそつと胸を撫で下ろした。

「それで、何故、『私』なんです？」

「それは貴女が、王室でも親 帝国 派の象徴とみなされているからです」

「別にそんなわけでは」

「ご自分をどう認識されているにせよ、貴女は王室における対 帝国 向きの『顔』として機能している」

「若い頃の留学のことを仰ってるんですか？」

「それに 帝国 皇族と婚約されていたこともよく知られてますしね」

「昔の話です」 フェリアは瞳を伏せた。

「『婚約者に戦死された悲劇の王女』、でしたか まあ、宣撫活動<sup>プロパガンダ</sup>には使いやすいネタでしたから、 帝国 でも 王国 でも派手に報道されてましたね。私も前線の塹壕にいたとき、ラジオのニュースで聞いた覚えがあります」

無神経に言い放つ少佐の横顔を、フェリアはきつく睨みつけた。

少佐はそれを平然と無視して、語り続ける。

「その後も 帝国 との親交を象徴するイベントによく出席されていた。貴女の意志というより、王室官房が貴女をそうデザインして使ってきたということなのでしょうが、ご自分で自覚がなかったということはないでしょう」

「……………」

自覚云々より、どうでも良かったのだ。王室官房の官僚達の組んだスケジュールに従って、パーティーやイベントで笑顔を振りまき、人当たりの良いスピーチを口にする。からっぽのままの心と身体を切り離して、平然とそんな日々を過ごせる自分を不思議に思いながら、気がつけばもう何年も経ってしまっていた。そこに官僚達がど

のような意図を込めていたのかをまったく自覚していなかった、と言えはたぶんそれは嘘になる。

だがしかし、やはりどうでも良かったのだ　　今度の結婚と同じように。

「何にせよ、貴女の実在は　帝国　と王室　そして勿論、　王国　との絆の象徴でした。その貴女が　帝国　の工作員に暗殺されれば、一時的にでも　王国　と　帝国　の関係を麻痺させることができる」

「でもそれは一時的なものでしかないわ。王室以外にも草の根の民間レベルから国政レベルまで、　帝国　とは分厚いチャネルが存在しています。両国関係は、私が殺されたぐらいで途絶したり断絶するような薄い関係ではないわ」

「一時的な麻痺で充分だったんです。その間に政権を奪取し、　帝国　軍を国土に引き入れる　　コープ少将の狙いはそこにあった」

「……？　コープ少将は反　帝国　政権を立てようとしているのでしょうか？」

何で　帝国　軍を招き入れなければならないのか？

「違います」少佐はきっぱりと否定した。

「コープ少将の目的は、　帝国　軍の侵攻を引き起こし、　王国　全土を戦場にすることです」

ますますよく判らなくなる。

疑念というより当惑の色を強めるフェアリアに、少佐は続けた。

「コープ少将の目的は、第一に　同盟　との戦争で自分の息子達を奪った　帝国　への復讐、第二にそれを決定した　王国　政権への復讐、第三に戦場から遠く離れて平和を貪ってきた　王国　市民への復讐　　徹頭徹尾、個人的な怨恨です。彼の蜂起につきあった他の連中の思惑はともあれ、彼自身は反　帝国　政権なんか立てる準備は欠片もしてませんよ」

「そんなバカな……！」

絶句するフェリアに少佐は告げた。

「貴女が先ほど指摘したように、地政学的にこの国に反 帝国 政権なんか成立する可能性はまったくありません。そんなものが簡単に成立するなんて信じ込めるのは、対外的な接触の少ない初心<sup>うぶ</sup>な親衛隊員や内務官僚くらいなものです。観念や情緒的な反発で一時的に政治を動かしても、結局は戦略環境が定める在るべき国家の形態に押し戻される そんなことは、コープ少将にも判っているはずだ。それほど知性に欠けた人物であるとは私たちも考えていない。

しかし、すべて承知であえてこんな馬鹿げた企ての首謀者に納まっているとすれば、理性がぶっ飛んで何もかも焼き尽くすつもりになっってしまったとしてもしか思えない」

「……………」

フェリアは式典会場の警備責任者として、つい今朝ほどに顔を合わせたコープ少将の容貌を思い浮かべようとして、失敗した。周囲の状況などろくに記憶に残っていない。そこに何か破滅的な決意を抱く兆候がうかがえたにせよ、彼女には気づきようもなかった。

「この後、どうなるんです……？」

「連中の当初の計画通りなら、貴女の死をきっかけに、王国 内の 帝国 政府施設、資産の接収や凍結。次いで 帝国 人や外交官の拘束ないしは国外追放、軍需品の輸出停止と短期間で矢継ぎ早に挑発行為をエスカレートさせ、最後の仕上げに 帝国 との領土係争地に国境警備隊を進出させる予定だそうで」

「係争地って……何十年も前からの政府見解で、公式にとくに諦めてる土地です」

「関係ありません。国内のナショナリズムを刺激するスイッチになればそれでいい しかし、どの道、 帝国 軍側もそこまで待つ気はない。先ほど話したように、 帝国 側でも事態の収束を図らねばと焦っている連中がいる。彼等の差し金で、国境のすぐそばに侵攻部隊が集結しつつあります。」

電撃的な侵攻で一気に 王国 全土を制圧すれば解決するだろう  
と思っ  
て  
いる  
ので  
し  
よ  
う  
が、話はそれほど単純じゃない。直接 帝  
国 軍が国土に進攻すれば、日和見を気取っている 王国 軍も、  
国土防衛に動かざる得ない。歴史的に見て、お国の入り組んだ地形  
に深入りした中原の軍隊は常に痛い目を見させられてます。平野部  
で  
の  
正  
規  
部  
隊  
と  
の  
戦  
闘  
は  
数  
で  
押  
し  
切  
れ  
て  
も、山間部でゲリラ戦に  
で  
も  
引  
き  
摺  
り  
こ  
ま  
れ  
ば、目も当てられないことになる。

最終的に勝てたとして、 王国 全土が蹂躪じゅうりゃんされ、下手をすれば  
数世紀にわたる遺恨を残しかねない。

あの 同盟 の工作員の計画でも、ここまでの事態は想定されて  
いなかった。本格的な戦争状態にエスカレートする前に 帝国 側  
に情報をリークして収束させるつもりだったようですが、逆に火を  
つけてしまった感がある。

まあ、この手の火遊びは得てして、肝心なところで制御が効かな  
くなりがちなんですが。

しかし、避けられるものなら、避けるべきだ、というのが我々の  
ボスの判断です」

「我々……？ 帝国 内部も一枚岩ではない、ということなの？」  
「察しがよろしくて助かります。」

そんなわけで、火消し屋専門の我々に出番が廻ってきた、という  
わけです」

そう言っ  
て  
少  
佐  
は  
口  
許  
を  
歪  
ま  
せ  
た。

火事場を愉しんでそんな消防士をどこまで信用していいものかし  
ら、と判断に迷いつつも、フェリアは訊ねた。

「判りました。それで私は、この後、どうすればいいんですか？」  
「いったん国境を越えます」少佐は頷いて言った。

「そこからあなたの生存の宣言とコープ少将の告発を、放送を通じ  
て国民に訴えていただく。それを聞けば叛乱鎮圧の大義を得て、国  
軍も動き出すでしょう。加えて貴女を担いで 帝国 軍が国境を越  
える可能性を暗にちらつかせてもいい。元々、個人的怨恨に端を発

した無理筋の叛乱ですからね。そこから先は、決意の弱い部隊から脱落して、放っておいても叛乱部隊は自壊します」

「そんな簡単な話なのかしら」

「そんなものですよ」 惘然とした表情のフェリアに、少佐は苦笑して応えた。

「問題は、国境を越えるまでが、そう簡単ではないという点なんですけどね      ほら」

「え？」

振り返るフェリアに、少佐はバックミラーの角度を僅かにずらしで示す。黒塗りのリムジンが二台、猛スピードで追い縋ってくる姿が映っていた。

「さっそくお客さんのお出ましですよ」



## 2（後書き）

事件の背景説明の第2話です。

この辺、どうしても長くなりがちなんですが、我慢してお付き合いください。

ここから先、派手に飛ばしていきますので。

さて。

それで要するに<王国>ってのは、スイスみたいな国だとも理解していただければ結構です。現実のスイスも、「永世中立」をうたいながら、WWIIでは膨大な軍需物資をドイツに輸出し、金融面で第三帝国を支えてしていました。まあ、別にスイスでなくとも、大国のそばでしたたかに生きる小国の典型として捉えていただければな、と。

こういった国々との関係の中で繰り広げられる、様々なトラブルを解決するのが少佐の本来の任務です。決して口の悪いゴスロリ・サイボーグにいいように振り廻されるのが仕事ではないのです（笑）。

次回もカーチェイス。派手に行きます。

更新は来週12月11日（日）の予定です。  
ではまた。

「どうするんです？」

「どうしましょうかね」

「どうしましょう　って、あなたね！」

とぼけた口調で応える少佐に、フェアリアが喰ってかかるうとしたそこへ、後方のリムジンから銃撃が開始された。

「！」

それぞれの助手席から黒いスーツ姿の男達が身を乗り出し、太い筒型弾倉ドラム・マガジンを装着した短機関銃S.M.Gを発砲し始めた。派手な発砲炎マスルフラッシュを閃かせ、断続的に撃ちかけてくる。

小口径の拳銃弾が後方から車体に降り注ぎ、着弾の衝撃が車内にガンガンと響く。

「大丈夫ですよ。一応、これでも防弾仕様車ですから」

悲鳴を上げるフェアリアの横で、少佐が平気な顔で指摘する。

「それにしても、警告もなしか。よくよくもって、コープ少将に嫌われてますね　何か恨みを買うような真似でもしたんですか？」

「知りません！」

「まあ、いいでしょう。どっちにしても、少々うるさい。片づけましょう」

さらりと言つてのけると、少佐はステアリングの根元の辺りに手をつ込んで、先にプラグの付いたケーブルを引っぱり出した。何を始めるのかと見ていると、今度は右腕の裾を引いて機械でできた手首を露出させ、そこにあるジャックにプラグをそのまま突っ込む。

マシーンナリイ  
機人！？

先の大戦中、急速に発達した技術のひとつに、戦傷などで喪われた四肢を機械化する機人化技術がある。当初は喪われた身体の再現に留まっていたその技術は、戦争の激化とともに、殺傷能力を高め兵器化する方向に開発が進んだ。その一方で、これも急速に自動

化の進む戦闘車両などと人間を繋ぐインターフェイスの機能も追及され、大戦末期には有線ケーブルで戦車や装甲車と接続する機人兵マシーンナリイが現れた。

出会ってからこのかた、ぎこちない様子もまったく見せず、生身の腕と同じように自然に動いていたので気付かなかったが、少なくともこの妙な軍人の右腕は機械でできていたらしい。

しかし、その右腕にケーブルを繋いで、何をしようと……？

啞然として眺めるフェリアは、次の瞬間、後部シートの更に向こうから聴こえてきた腹に響く轟音にさらに驚いた。慌てて振り返ると、二台のリムジンの内、先行する一台のフロントノーズから運転席までにかけてが、獣にでも喰いつかれたように穴だらけにされていた。ぐらりとスピンしたそのリムジンは後続の車輛を捲き込み、そのままカーブの後ろに消え　爆轟とともに赤黒い爆炎が吹きあがり、視界から流れ去る。

「今のは……？」

「後部トランクに機銃を仕込んでおいたんですよ」  
こともなげに少佐が告げる。

「……まるで軍事探偵物の映画みたいだわ」

「本職ですから」

「大人が観るものじゃないって意味です！」

「世の中、案外、子供の想像力以下の出来事でできたりするものですよ」

「……勉強になった、とは言いたくありません」

「なるほど」少佐は頷くと、ケーブルを繋いだままの右手で前方を指差した。

「ならば、次の授業です」

つられて前を見れば、今後は黒塗りの四角いバスのような箱形の車輛が、道路の真ん中の車線に陣取って前方を塞いでいる。

「親衛隊の装甲車輛です。さっきのリムジンの相手をしている間に、バイパスから先廻りされたらしい」

王都 での暴徒鎮圧も任務とする親衛隊の装甲車は、複数台繋いで駐車すればそのまま壁となつて道路を封鎖できるようになっている。それ故に直方体で構成された車体形状をしているのだと、その昔に参加した式典でコープ少将みずから説明を受けたことをフェリアはぼんやりと思い出していた。

その間も徐々に速度を落とした装甲車は、フェリア達の乗るスポーツカーとの距離を詰めにかかる。

少佐がステアリングを振って、装甲車の脇を擦り抜けようと試みる。だが、装甲車の運転手は器用に車体を操って、その隙を与えようとしない。

やがて、装甲車の車体後方の扉が観音開きに開け放たれた。そこには大口径の動力機銃を据えた銃座が設けられ、下を向いていた長い銃身が鎌首を上げる。

「……ねえ、この車の防弾性能って」

「あー、さすがにあの口径の機銃には通用しませんね」

少佐がのんきに応えるそばから、動力機銃の銃口が火を吹いた。発射速度があまりに早い所為か、工業用の電動ミシンが全力稼働するような唸りを上げ、機銃弾が路上にぶち撒けられる。少佐が巧みにステアリングを捌いて銃撃を避けようとするものの、何発かが車体を掠め、その度に激しい打撃音とともに車体が大きく揺さぶられる。

衝撃でフロントガラスが砕け、目の前が破碎されたガラスで真っ白になる。即座に少佐が左腕を突っ込んで左右に振り、前方の視界を確保した。激しい強風とともにガラスの破片が車内に舞い込み、フェリアは鳥打帽<sup>キャスケット</sup>を掴んで頭を下げると、悲鳴を上げて叫んだ。

「何か反撃できないの!？」

「エンジンルームに機銃を積むスペースがなかったもので!」

とばけた返事を怒鳴り返してくる少佐に、半ば絶叫するように命ずる。

「何でもいいから、何とかして!」

「了解　では、しっかりシートに掴まっててください！」

「え　？」

何をする気なのか　と訊ねるより先に、不意に横から身体ごと持っていかれるような加重に襲われ、ドアに強く押し付けられた。それが車体ごとその場でスピンしているのだ、と気づいた時には、後方のトランクルームから先ほどと同じ轟音　機銃が発砲している！？

直後に再度ドアに押し付けられてもう一度スピン　我に還った時には、再び車体の位置は元の進行方向正面を向いていた。ただし、前方の装甲車の銃座はあらぬ方向を向き、銃座のそばにいた黒い制服の親衛隊員がひとり、路上に転がり落ちようとしていた。

あ……え……何が起こったの……？

まさか、この速度で走りながら、その場で旋回して後方の機銃で銃撃を加え、さらに旋回してまた正面を向いた、と。そういうことなのか？　たった二車線しかないこんな狭い道幅の道路で。カーブの多い曲がりくねったこんな道で。一歩間違えば、目も当てられない重大事故に

今更ながらに恐怖感が全身を襲い、血の気を喪って震えるフェリアに少佐は鋭く告げた。

「加速します」

フェリアの返事を待たずにアクセルを床まで踏み込む。前方から蹴飛ばされたように身体がシートに押し付けられる。カリカリにチーンナツプされた8気筒水冷エンジンが咆哮を放ち、防弾装甲と後部機銃で重くなった車体を強引に前へと弾き飛ばす。フロントグラスも砕け散り、車体のあちこちを穴だらけにされたスポーツカーは、既に本来の流麗なフォルムを喪い、空力的には残骸と言い切ってもいい有様にまで成り下がっている。だが、それでも己の出自への誇りを懸けるかのような力づくの加速性能を絞り出し、車体を前へと押し込もうとする。エンジンだけでなく、車体全体で傷ついた野獣のような叫びを放つその車体を御して、少佐は前方の装甲車の

右脇に空いたわずかなラインへと突っ込んだ。

その動きに気付いた装甲車の運転手が、車体を崖側に寄せてスポーツカーを挟みこもうとする。

怯まずアクセルを踏み込んで装甲車の運転席のそばまでくると、

少佐はリアウィンドウを開け、フェリアに叫んだ。

「ハンドルを頼みます！」

「え？」

その声に振り返れば、少佐はステアリングを手放して窓から身体を乗り出そうとしていた。

「ちよつと！ 何を！？」

慌ててステアリングを掴んで声を上げるフェリアの前で、少佐はその機械の右手を装甲車のドアにぴたりと当てた。

気づいた助手席の親衛隊員が慌てて短機関銃S M Gを構えようとするその姿に、

「遅い」

と一言だけ告げると、右腕に内蔵された超振動発振器のジャイロモーターを発動させる。重く弾かれるような音ともに、装甲車の助手席のドアが大きくへこみ、背後の親衛隊員もろとも内側に吹っ飛んで、さらには運転席の隊員まで捲き込んだ。

急に車体をふらつかせ始めた装甲車をよそに、少佐はフェリアからステアリングを取り戻すと、アクセルを踏みこんでそのまま装甲車を抜き去った。

その後方では、運転手を喪った装甲車が、カーブを曲がれずにガードレールを突き破り、河面に飛び込んでゆく。

「……終わったの？」

「いえ、もうひと幕」恐る恐る顔をあげるフェリアに、少佐は軽く顎をしゃくった。

「今度は空からのお相手です」

ぼろぼろのスポーツカーと並走するように至近距離を飛ぶジャイロ機の姿に、フェリアはそのまま気を失いかけた。

機体頭上の回転翼<sup>ローター</sup>によって揚力を得て飛行するジャイロ機は、これも大戦中に実用化されたもののひとつである。飛行機のように長大な滑走路を必要としない垂直離着陸性、地上すれすれの高度で自在に上昇と降下を繰り返す高い機動性を持つジャイロ機は、対地攻撃や小規模の兵力投入を目的とする戦術航空ユニットとして理想的な存在で、帝国と同盟とを問わず、戦場で急速に普及していた。

戦後、軍での需要は大幅に縮小したが、各メーカーが装甲を外して速度と航続距離を増した民生用機を安く販売し始めたことで、治安機関など後方の公的機関向けへの普及も広がった。

もつとも、「安く」とはいつても、車輛などとは桁が違う金額だし、燃料代やパイロットの件費、機材メンテナンスといった運用経費まで含めたランニングコストとして一機当たり毎年民家が一軒買えるくらいの費用が飛んでゆくので、まだまだ予算の潤沢な自治体や組織しか導入できていない。

それでもさすがに金余りの王国だけに、国内治安を主任務とする親衛隊にもまとまった数のジャイロ機が導入されていた。

今、フェリアの眼前に浮かんでいるジャイロ機もそのうちの一機で、機体の尾部には親衛隊のマークがはっきりと見て取れる。任務の性格から見ても対空砲火への備えなど必要ないので、余分な装甲は設計段階から既にはぶかれており、輸送能力と空力性能を優先した丸みのあるフォルムをしている。こんな時でさえなかったら、フェリアも可愛いらしいとさえ感じたかもしれないデザインの機体だった。

その後部、<sup>カーゴルーム</sup>貨客室の側面ドアが開け放たれ、据え付けられた動力機銃の銃座に親衛隊員が取りついて、こちらに銃口を向けていた。

「どうするの!？」

「さすがにトランクの機銃で撃ち落とすのは無理がありますね」

他人事のように語る少佐に、フェリアは思わず声を荒げて怒鳴った。

「何で、そんなに落ち着いてられるんです、貴方は!？」

「騒いだからって、どうなるものでもありませんから」

平然と言つてのけたその直後、ジャイロ機の銃座が発砲を開始。

フェリア達の乗るスポーツカーの周囲に着弾し始める。

再び頭の鳥打帽<sup>キャスケット</sup>を掴んで、悲鳴を上げるフェリアをよそに、

「やれやれ」と呟いて少佐はステアリングを力強く左右に振る。

蛇行しつつ、それでもスピードを落とさずに、スポーツカーは器用に次々にカーブをクリアしてゆく。驚くべきドライビング・テクニクというべきだったが、ジャイロ機も付かず離れずに追隨する。河面すれすれの高度、河岸の岸壁そばという位置取りを考えると、こちらのパイロットの度胸と技量もなかなかのものだった。

だが、穴だらけのスポーツカーとジャイロ機では、はじめから勝負にならない。身を隠せるトンネルのようなものも当座、すぐには辿りつけそうにない。

このままでは、すぐにジャイロ機の火線に絡め取られ、今度こそ蜂の巣にされかねない。

これは、さすがにもう駄目なのかしら　と、フェリアが覚悟しかけたとき、

「そろそろ片付きます」

「え？」

驚いて顔を上げたその目の前で、ガラス張りのジャイロ機の操縦<sup>コックピット</sup>席が一瞬で白く曇った。次いで機体上部の回転シャフトと後部のエンジンに火花が散り、すぐに小さな炎を吹き出す。

ぐらりと揺れて河岸より離れたジャイロ機は、そのまま急にバランスを崩して転倒。身を擦って転がり込むように河面に飛び込んで爆発した。

少佐はにやりと笑うと、窓から左腕を突き出して軽く振る。

「何？」



「私の部下です。この辺りで親衛隊のジャイロ機に追いつかれるだろうと思い、あらかじめ待機させていました」

振り返れば、後方の崖の上に大柄な男が物干し竿のような長い銃身の機銃のようなものを片手に立っている姿が、遠目に一瞬だけ見えた。

だから、少佐は落ち着いてられた　いやいや、そんな読み、いくらでも外れる要素はあった。ジャイロ機が一機でなく二機でこられたらそれで状況は一変していたろうし、この車がここまでの銃撃に耐えきれずに潰れていたことだってあり得る。

どうしても転がりかねない危うい状況で、それでも抜け抜けとすべて自分の計画通りに事が運ぶとのんきに構えていられたこの男の神経はどうなっているのか？

いや、それを言えば、さっきの運転もそうだ。こんな狭い道幅の路上で、高速走行する車輛をその場で一回転させるなど、正気の沙汰ではない。失敗するとは微塵にも思わなかったのか、この男は。

それを「必要だ」と判断するや遂巡なく即座に実行に移る決断力それは胆力とか勇氣とかの有無といった問題ではなく、何かしらの狂気に近いもののようにフェリアには感じられた。

果たして、このままこの男についていいものなのかどうか……？

いや。それを拒絶する選択肢がないことこそ、この場での最大の問題なのだ。

今更ながらフェリアは頭を抱え、暗澹たる気分でフロントガラスをなくしてただの空枠と化した前方へと目をやった。

そこでは、低く垂れこめた灰色の空から、白く小さな雪の欠片が舞い始めていた。

### 3（後書き）

スポーツカーで逃げる少佐とフェリア王女を追って、次々と親衛隊の追撃部隊が襲いかかるお話。

実はこのお話を思いついたファーストイメージは『007 慰めの報酬』冒頭でのカーチェイスだったりします。ですので、少佐達の乗るスポーツカーはアストンマーチンのイメージでひとつ。いろいろ無茶なんです、まあ、それだけに少佐の無茶っづーか、ぶっ壊れ具合もここで明らかになるエピソードでもあります。恐怖感や危機感がまったくないわけではないのでしょーけど、バランスの置き所が常人とまったく違うのでしょーね。

次回はそのあとに続く冬の山中の追撃戦に備えて、敵味方、準備を整えるお話。

更新は来週12月18日（日）の予定です。  
ではまた。

「そろそろです」

パイロット

ジャイロ機の操縦手が、機内通話用のヘッドセット越しに告げる。シラン大尉は無言で頷いて、操縦席の後ろから前方を見た。

粉雪の混じり始めた河面すれすれの高度を飛行するジャイロ機の進路の先には、河岸に設けられた国境警備隊の基地施設が見えてきた。いくつかの兵舎が寄り集まり、河岸にはボートを停泊させたはしけのようなものもある。

ほどなく上空に達したジャイロ機は、教練用の営庭グランドの脇にある着陸ポートの上をいったん通過し、それからゆっくりと降下を始めた。「着陸はしなくていい。地表すれすれまで近づけてくれれば、そこで飛び降りる。私を降ろしたらそのまま基地に帰投しろ」

プレストーク・スイッチ

送信ボタンを押さえながらそう言い終えると、ヘッドセットを外

サーベル

カーゴルーム

し、機内に立てかけていた軍刀を掴んで貨客室側面ドアを開け放つ。

激しい気流が流れ込み、軍用マントの裾がばたと音を立てて

ローター

ダウン・ウォッシュ

翻る。回転翼によって生じる下方気流が地面に跳ね返ったものだろう。

気にせず、大尉は機外に身を投じる。

地上まではまだ多少の高度はあったものの、特に足を傷めることもなく着地した大尉の下へ、数人の国境警備隊隊員達が駆け寄ってきた。山中での活動を任務とする山岳部隊なだけあって、いずれも屈強な体躯をした大柄な男達だった。

無事着地した大尉の様子を見届けると、ジャイロ機は上昇を開始し、すぐに河面の彼方へ去っていった。

「ようこそ、大尉」若い士官が片手を差し出す。

「国境警備隊第119山岳警備連隊のケイス・ホルト中尉です」

一旦、何かを見定めるようにその手を冷たい視線で眺めてから、大尉は中尉の手を握った。

「……王室親衛隊のエダ・シラン大尉だ」

「兵舎の方に温かい飲み物を用意してあります。そこで概要説明を  
フリーフィンク

「いや、不要だ。時間が惜しい」大尉は首を振った。

「ここで済まそう」

「判りました」

頷く中尉に、大尉は単刀直入に訊ねた。

「君は今度の任務の性格をどこまで理解している？」

「今度の決起には当初から参加しています」

「彼等は？」

背後に控える部下たちに目をやり訊ねる大尉に、中尉は胸を張って応えた。

「部隊の下士官達です。彼等も、同士として決起の趣旨に賛同する者たちです」

「兵は？」

「彼等には何も告げていません。しかし、こういう状況下で信頼が置ける人間を中心に少数精鋭で選びました」

「結構だ」大尉は頷き、続けた。

「フェリア王女と 帝国 の工作員のその後の足取りを知りたい」

「クトラ口近くで国道を下りてからは足取りを見失っています。地元の警察も警戒線を張っていますが、捕捉できていません」

「何故だ？」

「この辺は地元の農家が勝手に作った私道が入り組んでるんです。ほとんど舗装はされてませんが、人だけでなく車が通れる道も珍しくない。地元の警察官でも迷うくらいで、一度、そこに入りこまれると、大規模な山狩りでもない限り簡単には見つけれません」

大尉は小さく舌打ちし、先を促した。

「それで、連中の行先に心当たりは？」

「国境を越えるのなら、装備を揃える必要があります。麓の街で今から登山装備を購入するとは考えにくい以上、おそらく山中の山小屋か何かに登山装備を事前集積しているものと考えられます。しか  
デボ

し、地元住民の目があるスキー場近くや一般登山道、わねわね国境警備隊の警戒線の近くにある小屋は避けるはずです。

それに女の足で国境を越えられるルートも限定されますから、連中が利用できる小屋の数はさらに限られてきます」

頷く大尉の前に地図を広げ、中尉は続けた。

「最終的に利用が想定される山小屋は、こちらに印を付けた五つです」

「……………」

大尉は無言で地図を睨みつけた。

いくら地図に載っていない私道が縦横に走っているとはいえ、民家の少ない奥地まで車の走れる道が通っているとは思えにくい。何の装備もない状態で、女連れで山中を長歩きするとも思えないから、奥地の方にある二軒の山小屋は無視していい。

残る三つの内、ひとつは三方を勾配のきつい丘に囲まれていて見通しが利かない。発見されにくい代わりに、追撃部隊に接近されても気付かない懼れがある。おそもうひとつは、背後に急な崖を背負っていて、ここからロープで降下して襲われたらどうにもならない。

となると、最後に残った麓により近い、なだらかな丘の上にある山小屋が一番怪しい。長期間潜伏するならともかく、装備を整えるだけならこのくらい見晴らしがいい方がいい。周囲の地形からして、私道が近くまで通っている可能性も高かった。

「この小屋までどれくらいで行ける？」

「今から出発するのですしたら、三時間もあれば」

「遅い！」鋭く叱責するように大尉は言った。

「ジャイロ機で強襲を掛けられないのか？」

「無理です」中尉は首を振った。

「天候が崩れ始めてます。ただでさえ山間部の空気の流れは急に変わって危険なんです。山頂から吹き下ろす強風に巻き込まれたら、一発で叩き落される」

「三時間もあれば、国境を越えられてしまうぞ」

「まさか」中尉は肩をすくめた。

「そこから国境線までは、大人の男の足でも半日は掛かります。

帝国 側の人家まではさらにもう半日掛かる。途中で夜になるし、天候も悪化してる。女連れの足で、そんな無茶は」

「フェリア王女は、乗馬と山歩きが趣味で基礎体力は申し分ない」

大尉は冷やかに指摘した。

「同行している男は、帝国 の軍人で、こういった過酷な環境でサバイバルの生き残りと戦闘行動を得意とする専門家だ。そして、自分が武装した戦闘集団に追撃を受けていることを充分に理解している。多少のリスクと引き換えに時間を稼げるなら、躊躇ためらわず時間を得る方を選ぶだろう」

「……判りました。しかし、やはりジャイロ機は出せません。代わりに、近くで演習中の部隊がいますから彼等に向かわせましょう」

「演習中の部隊……？」

「山岳戦車一輜と歩兵一箇小隊からなる、山岳混成小隊です。実弾も持って出てます。彼等に連中の頭を押さえさせ、その間に後方から我々が追い付く これでどうです？」

「……いいだろう」

大尉が頷くのを受け、中尉は背後の部下たちを振り返って指示を發した。

「よし！ 五分で出立する。総員、急げ！」

「いい景色だわ」

やっとの思いで辿り着いた山小屋の二階、ベットルームの窓を開け放ち、一面の雪景色に彩られた山々を前にフェリアは感慨深く呟いた。

「自分が逃亡者だということも忘れそう」

「忘れてもらっては困ります」どすん、と床に巨大な背負い式のザツクを置いて、少佐が釘を刺す。

「これからが本番なんですから」

「……できれば幕が上がる前に降板したいのだけど」

「生憎、今から主演女優の代わりを見つけるのは無理です」

「なら、せめて相手役を変えてちょうだい」

「次の公演の際には考えましょう」

フェリアの嫌みを軽くかわしながら、少佐はザックから取り出した白いダウンジャケットを取り出し、そばのベットのの上に置いた。

「他にも、このザックの中に着替えと装備一式を入れておきました。着替えたらリビングまで降りて来て下さい」

そう言っさつさと部屋から出て行ってしまう。

フェリアは溜息をひとつついて、服を着替え始めた。

手早く着替えを終え、階下のリビングに下りてくると、同じく着替えを済ませた少佐が、くわえ煙草で大きな箱型の無線機を耳に当て、誰かと話をしていた。

そう言えば、いつの間にか眼鏡を外している。やっぱり伊達眼鏡だったのか、あれは。

そんなことを考えながら、聞くとともにしに、通話の内容に聞き耳を立てる。

「そつだ、軍曹。王女は無事だ。装備もすべて回収した。準備が整い次第、すぐにここを出る」

この時間から山中を歩いて国境を越えるつもりだろうか。時刻はすでに午後を廻って久しい。外はまだ明るい、山の日没は早い。行程の半分以上は夜になるだろう。あえてそんな危険を　ああ、たぶんやるに違いない、この男なら、とフェリアはげっそりとした気分

に陥った。

「いや、それは想定内だ。ルートは変更しない。状況<sup>ケース</sup>3の仕掛<sup>オヤジ</sup>けを使う。代わりに迎えの方を前進させる。構わん、將軍には後で俺が話を付ける」

そこで一旦、無線機から顔を離し、フェリアに声をかけた。

「そちらのキッチンにコーヒーが沸いてます」

「珍しく気が利いてるのね」

「飲むのは道中です。携帯用の保温瓶もテーブルの上に置いてますから、コーヒーを入れてこちらに持ってきてください」

「……………」

一国の王女を捕まえて召使扱いか、と力チンときたが、再び無線機の相手に戻ってしまった少佐に何を言っても無駄なような気がして、諦めてキッチンへと向かう。

コーヒーを入れた保温瓶をふたつ手にしてリビングに戻ってくると、無線機との通話を終えた少佐が、今度はソファアに腰掛けて自動小銃を組み立てていた。

「誰と話してたんですか？」

「部下です。ついさっき、アンチマテリアル・ライフル対物狙撃銃でジャイロ機を撃ち落とした男です。貴女も先ほど会ってるはずですよ」

崖の上にいるのを遠目で一瞬だけ目にしたのを「会った」というなら、あの大男のことだろうか。

「ここに用意してあった登山道具一式も、彼に用意させたものです  
どうですか、着心地は？」

「……………悪くないわ」

ハイネックのアンダーウェアにインナージャケット、ダウンジャケットとこれだけ分厚く着込んでも身体の動きに違和感がないのは、よほどそれぞれのデザインがしっかりしているからだろ。それについて、体温も充分に保護されている感覚がある。長居するつもりがないこともあってか、暖炉にも火はついてなかったが、寒さはまったく感じない。メーカーのタグはすべて剥ぎ取られていたが、帝国製にせよ 王国製にせよ、いずれ名にし負うメーカーの最高級品だと思われた。

「良かった」不意に柔らかな表情で少佐は笑った。

「後で顔を合わせると思います。その時、本人にも直接言っ



て下さい」

「……………」

フェリアは奇妙な違和感を覚え、当惑した。危地にあっても常に飄々とした態度を崩さず、冷やかに辛辣で皮肉な台詞ばかり吐き続けている少佐の印象と、唐突に見せられたこの人間臭い表情がフェリアの中でうまく整合せず、妙にどぎまぎしてしまう。

「どうかしましたか？」

「べ、別に何でもありません！」言って、逆に訊ねる。

「それより、本当にこれからすぐに出発するんですか？」

「勿論です」

「すぐに夜になってしまっわ」

「知ってます」

「天気も崩れ始めてます」

「そのようですね」

「危険です」

「このままここにいれば、すぐに敵に踏み込まれます。その危険よりはましです」

ああ、そうくると思った 想定通りの問答でやりこめられる自分に釈然とせず、なおも喰い下がる。

「私はオンシーズンの山歩きトレッキングしか経験がありません。冬山登山はるか、本格登山の経験さえないのよ」

「そう伺ってます」

「救助を呼べる立場でもなし、足を滑らせて滑落事故でも起こせばそれで終わり 自殺行為だわ」

「そのために私がいます」

静かな口調で少佐が断言した。

「……それを信じると？」

「すべてそれが前提となります。今の貴女に、それ以外の選択肢はありません」

「……………」

なんて傲慢な男なのだろう、と啞然とするフェアリアをよそに、少佐が立ち上がって宣言する。

「では参りましょう、王女殿下。何、大丈夫。神の祝福を受けた花嫁とともに、神々の懐深き山々へと向かうんですから」

……その花嫁の結婚式をぶち壊したのは、どこの誰だ？

#### 4（後書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。

第4話、敵味方、それぞれが追撃と逃走の準備を整える回です。

今回、繋ぎの回なのであまり語れるネタが少ないのですが、それでもひとつふたつほど。

まず、親衛隊のシラン大尉が地図を見ながら、少佐とフェリアの潜む山小屋に当たりをつけるシーンがありますが、軍用地図上の等高線とか植生などの情報を基に分析したものと思われれます。こういう地図を読む技術というのは軍人にとって重要な技術<sup>スキル</sup>です。

自分の作品の場合、軍人を描く場合、なるべくこういう「技術者としての側面」を拾ってゆこうとは意識しているので、これもその一環の描写となります。

それとその山小屋について。

要するに、ここにあらかじめ登山装備とか武器なんかを運び込んでおいたものを使っているわけなんです。別に軍曹がひとりでもかも用意したわけではなく、少佐の指揮下にある6課の作戦チームによって揃えられたものです。

大人数がちよこまかと動いているのを描写しだすと話が長くなるのでばっさりカットしましたが、こうした装備品を調達する人とか、親衛隊や国境警備隊の動きを監視している人とか、＜王都＞に残ってスタッフ間の連絡を担当する人とか、そうした裏方の人たちの活動が背景にあって初めて少佐達の活躍が成立しているのです。

……というより、作戦の統括責任者だというのに、何で少佐が一番派手な立ち廻りやってるんだというそもそな話もあるんですが、その辺は本人の趣味だとしか（爆）。

今回は第5回&第6回の2話同時公開で、少佐vs第1山岳混成小隊の激突編。

山岳戦車を擁する機動歩兵小隊を相手に、少佐がたったひとりで如何なる死闘を繰り広げるのか？

更新は来週12月25日（日）の予定です。  
ではまた

山々に囲まれた 王国 の王族の中でも、自分は山には親しんできた方だとの認識はあった。

だが、それでも本格登山となれば話は別だ。ましてや冬山登山など、思いつくだけでも周囲から全力で阻止されていただろう。

それ以前に、今日の午前中にはウエディングドレス姿で気の進まない結婚に悩んでいた自分が、こうして夕暮れ迫る山中をスノーシューでざくざくと雪を踏みつけているとは思ってもよらなかった。

「人生は意外性に満ちてるということでしょうか」

「……どの口で言ってるの、貴方？」

少なくとも、今日一日のフェアリアの人生の意外性は、すべて眼前のとばけた軍人からもたらされたものだった。

山小屋を出て二時間弱、早くもフェアリアは息が荒くなっていた。

ある程度、覚悟していたとはいえ、山歩きとは体力の消費が桁違いだった。いや、それ以前に、ペースも速く、加えて少佐のルート取りがかなり無茶だった。急な斜面でも迂回せず強引に登ることも珍しくなく、ついてゆくのがやっとだ。

恐らくはちよつとでもルートをショートカットして時間稼ぎしようとしているのかもしれない。だが、これでは逆効果だ。このままではすぐにへばって潰れかねない。

もつとも、保温瓶ひとつくらいしか持っていないフェアリアより、自動小銃や軍刀サイベルを始めとして、荷物のほとんどをひとりで背負い込んでいる少佐の方が、はるかに体力は消費しているはずだった。しかも、時折、フェアリアよりずっと先まで先行していたかと思うと、逆に後方に廻って彼女の背中を押したり、さらに後方で痕跡を消したりと常に動きまわっている。それでいて、呼吸が荒くなるわけでもなく、汗ひとつ浮かべているわけでもない。どこまでデタラメな体力の持ち主なのだろうか。

悪態のひとつも付きたいところだったが、そんな余裕もなくなりつつあった。

とは言え、こちらから休憩を申し出るのも業腹だった。プロを相手につまらない意地を張っていることは自分でも承知の上だったが、また少佐のあの澄ました表情で見下されるのは嫌だった。それを思えば、どうせ最後は自ら口にせざるえないにしても、あと一歩、もう一歩でも先に進んでからと足を前に踏み出してしまおう。

周囲は雪に覆われた冬枯れの森。冷たく澄んだ空気。低く垂れこめた灰色の雲の下、四方を峰の高い山々に囲まれ、遠くには、森林限界より上の高度に露出した岩肌をカンバスに、雪と陰の極端なコントラストが描き出されている。神々のおわしますます天空の座地上にいては決して得られない、幻想的な景観だった。

こんな時でもなければ、時折足を留め、その美しさに酔いしれてもいい眺めだ。

なのに前に行く男の広い背中を睨みつけて、足を無理やり前に押し出すことだけしか頭に浮かばないというのは、どうにも人生の無駄遣いにしか思えない。

それでもさすがに限界を覚えかけた時、不意に少佐が足を留めた。「止まって」

こちらの消耗に気付いたのだろうか。感謝より先に意地の方が口に出た。

「……まだ、大丈夫」

「ここを動かないでください」

「？」

フェリアが疑問を口にするより先に、少佐は背中中のザックを下ろすと、背負っていた自動小銃を正面に構え直し、銃口を覆う雪除けのカバーを外した。次いで腰の軍刀を背中<sup>サベル</sup>中に廻して、紐でしっかりと結び直す。

「何を？」

「ちよつと『戦争』をしてきます」

「は？」

あっけに取られるフェリアを置いて、少佐はさつさと斜面を登ってゆく。まるで羽でも生えてるかのような軽やかな足取りだった。それを見る限り、さつきまでの強行軍も、この男にはこちらに合わせでかなりペースを落としていたことになる。

勝手になさい！

取り残されたフェリアは、不貞腐れるように近くの木に背を凭<sup>もた</sup>れた。

そうやってしばらく息を整えている内に、少佐が最後に残っていた台詞が気になった。

「戦争」……？

敵が来たのか いや、そもそも「敵」とは何だ？ 誰のことなのか？

ここまでフェリアを追って、警告ひとつ投げかけるでもなく銃撃を加えてきたのは 少佐の説明が正しければ、だが いずれも王室鎮護の藩屏たる親衛隊の隊員達だ。いや、それ以前に彼等は王国 臣民で、それを迎撃し、容赦なく殺戮してのけたのは、外国人である 帝国 軍人の少佐だ。

「王女」としての自分は、無邪気に自分の命が助かったことを喜んでいられる立場ではない。

「立場」、「立場」、「立場」、……………。

何をやってるのかしら、私は……？

空を見上げれば、針葉樹林の細い木立の合間から音もなく雪が舞い降りてくる。先ほどより、やや降り方が強くなっているような気がする。下手をすると、夜半には吹雪いてくるかもしれない。

舞降る雪の始まりの一点を見定めようとするかのように、雲に覆われた低い空を見上げる。

いや、あの変な軍人に振り廻されている今のこの身だけの話では

ない。

この数年、「王女」としての「立場」が指し示す振る舞いを、「そう在るべき」と周囲から求められる振る舞いだけを重ね、そのひとつの集大成として今日の結婚式があつた。

そして、これからも同じような日々を重ねるつもりだったのか。たぶん、そうだ。何も考えない、考えることから逃げ続ける毎日  
がこれからも続いてゆくはずだった。

自分が為すべきことは、すべて「立場」が教えてくれる。それに従っていれば、いつだって正しくて間違っていない。そのはずだった。

それが、物の見事に吹っ飛んで、雪の山中を国境目指して歩いて  
いる自分がいる。

今の自分の「立場」とは何だろう？

いや、自分が「王女」という「立場」だからこそ、あの 帝国  
軍人は自分をこうして連れ廻し、国境の外まで連れ出そうとしている。  
そこでまた「王女」としての役割を果たさせようとしている

帝国 にとって都合のいい形で。

勿論、それが 王国 にとっても正しいことなら、別に拒絶しなければならぬ謂われはない。コープ少将の傷ついた魂の鎮魂のためだけに、国土を戦場と化すわけにはいかない。偏狭なナシヨナリズムに拘って、 帝国 の力を借りることを躊躇うつもりはない  
「王女」たる「立場」の自分の判断として、たぶんそれは間違っていない。

フェアリアは眉を寄せた。

何だろう。

正しいはずなのに、間違っていないはずなのに、大切な何かがつ  
つそり抜け落ちていくような気がする。何かを忘れていくような気が  
する。

「……『高貴なる者の義務』……」

呟いてみる。そう言って自分の前から去った彼は、戦場へ行くこ



との意味をそう語った。帝国 皇族としての「立場」がそう言わせたのか。その言葉を、口にするとき彼はどんな気持ちだったのだろう。婚約者である自分の前で、その言葉を口にしたとき。

そう言えば、その言葉を聞いた時、自分は何を感じていたのだろうか。どう思ったのだったか。

よく思い出せない。思い出せない。思い出せない。  
違う。

思い出すのが、怖い……！

心臓を鷲掴みにされるような恐怖にフェリアが襲われたその瞬間  
遠くで銃声が鳴った。

王国 国境警備隊第119山岳警備連隊に所属する第1山岳混成小隊は、山岳戦車一輦に、歩兵一箇小隊三〇名から構成される機動歩兵小隊だった。

山岳戦車とは、帝国 軍や 同盟 軍で普通一般に「戦車」として知られる主力戦車とは異なり、山中の険しい斜面や細い道でも運用できるよう、軽量で車幅も小さく設計された戦車のことである。主力戦車ほど大口径の砲は積んでいないが、成形炸薬弾HEATのような化学エネルギー弾を使えば、それなりの装甲貫通力は確保できる。ただでさえ兵力展開の難しい高地に自力走行可能な装甲火力を持ち込める意義は大きく、先の大戦の中盤以降、西方辺境領でも北方に位置する山岳地帯で激しい機動戦闘が発生する中、必然的に開発された兵器だった。

その後、帝国 軍や 同盟 軍ではさらに軽量化を図り、逆噴射ロケット付パラシュートを付けて空挺戦車とする研究も行われている。もっとも、さすがに投下・着地時の衝撃で車内の機材が故障することが多く、今のところ構想倒れに終わっている話ではあるが。  
王国 陸軍や国境警備隊で採用されている山岳戦車は、大戦末期

に 帝国 陸軍で正式採用された 王国 製モデルをベースに、傾斜地での発砲を可能にする油圧式サスペンションなどを強化し、赤外線投射型の暗視システムなどを搭載した改良型で、戦後の 帝国 陸軍では高価すぎて導入を見送ったとされるほどの代物である。

もつともそれは、戦後の 帝国 陸軍の山岳戦の操典が変化したことに起因する。高地に戦車を送り込むより、装甲ジャイロ機性能や火力を高めてその代わりとする方向に向かっていたのだ。

それに対して、巨大な主力戦車を展開できる平地の方が少ない王国 では、むしろ国土の大部分を占める山間部で使用できる山岳戦車の機能向上に執着している節があった。

とは言え、 帝国 陸軍に採用を見送られたことによつて、予想生産台数が激減し、ただでさえ高い調達価格はさらに高騰することとなった。

国境警備隊にこうして山岳戦車が配備されている背景には、その辺の事情が関係してくる。常識的に考えれば、基本的に越境する密輸業者の摘発や密入国者の摘発、山岳地帯での搜索・救難活動などを主任務とする国境警備隊が戦車など必要とするはずもないのだが、生産台数を少しでも増やして調達価格を下げようとする陸軍の思惑がそこにあつたのだ。

加えて、 王国 陸軍は国内治安を担当する親衛隊にも、この戦車の導入を積極的に働きかけていた。その結果、親衛隊や国境警備隊が過剰な装甲火力を取得することとなり、それが彼等の今回の蜂起への要因のひとつとなつたのではないかと事件後に一部で指摘されることとなる。

その山岳戦車を中心に、白い冬季戦用野戦服を着込んだ国境警備隊の兵士達が戦車を取り囲むように同心円を描く形で展開していた。途中まで戦車の上に跨乗していた兵士達も、予想接敵地域に近付いたことで全員地上に降りている。

まずもって教科書通りの対応と言えた。

強大な火力を誇る戦車は、しかし、どうしても車内からの視野が狭くなるという欠点を持っている。それを補うには、車外に展開する歩兵それぞれの肉眼に頼る外はない。

また、ロケット兵器の軽量化と成形炸薬弾HEATの高性能化によって、歩兵が携行可能な対装甲火力は強力になる一方である。至近距離に肉薄された歩兵に対戦車ロケット弾を撃ち込まれてしまえば、戦車には対応しようがない。

つまり戦車にとって理想的な戦闘とは、随伴する歩兵達によって敵歩兵の肉薄攻撃を防ぎつつ、ある程度離れた距離からその火力を存分に叩き込み、敵を粉碎することにある。

周囲を密集した木立に囲まれたこんな遮蔽物だらけの山間地を戦車だけで進むのは、自殺行為でしかないのだ。

だから、第1山岳混成小隊のこの部隊展開は、戦車運用の基本に忠実で、その意味で間違っではないなかったのだが、彼等の不幸は実戦経験もなくただ教科書をなぞっているだけに過ぎなかったということだった。

その銃声が鳴り響いた時、ほとんどの兵士達が方角を違えずに音のした方角に自動小銃を向けていた。

さすがの練度だった。彼等の中には、日常的に武装した密輸業者や逃亡犯との戦闘を経験している者も少なくない。その意味での「実戦経験」には不足はない。

その銃口の先、距離にして一〇〇弱離れた斜面の上の木立の間に、自動小銃らしき銃を手にした男　少佐が不敵な笑みを浮かべてこちらを見ている。

「撃て！」

指揮官の指示とともに、兵士達は一斉に射撃を開始した。

精度の高い集中射撃を素早く木の陰に隠れて避けながら、少佐は苦笑した。

「やれやれ、ここでも警告なしか」

この辺り一帯は、今は狩猟期のご真ん中なはずだ。民間のハンターかもしれないという発想はないのか。あるいは、それでも構わないと考えているのか。どっちにしても剣呑な話だ。

そうこうする内に、発砲と着弾のハーモニーに交じって複数の雪を踏み分ける音　正面から制圧射撃を加えつつ、一部の兵士が側面に廻り込もうとしているのだ。

「いい判断だ」

反応が早い。少佐の知る　帝国　陸軍の歴戦の兵士達と比べても、遜色はなかった。

勿論、感心している場合ではない。

少佐は側面から近づく兵士達に自動小銃で軽く一連射を加えて牽制すると、身を翻して走り出す。

そこへ山岳戦車が発砲　少佐が身を隠していた木の幹へ、粒の荒い大きな鉄球を詰め込んだ対人榴弾が撃ち込まれて太い幹が一発でへし折れた。

「こっちはまだまだだな」

配備されてからまだ日が浅い山岳戦車の反応は、兵士達よりワントンポ遅い。もっと歩兵と連携し、積極的に攻撃を加えてくるべきだった。付け込むならこの辺だなと呟きながら、少佐は木立の間をジグザグに縫い駆ける。

兵士達の放つ銃弾が木々の表皮を削り、木っ端が弾け飛ぶ。至近距離で弾けた木片が、頬を小さく切り裂く。

それを気にも留めず、倒木の背後に飛び込むと、自動小銃を単発モードに切り換えて発砲。追い縋る兵士達の内、先頭のひとりをヘッドショット一発で射殺する。

それを見て、後続の兵士達は即座に手近な遮蔽物の陰に隠れ、反撃を開始する。その一方で別の一隊には再び迂回させようとしているようで、雪を踏む音が途切れない。

常に運動を維持し、敵に圧力を加え、考える暇いひやすを与えな　とは、士官学校の戦術教程で最初に叩き込まれる鉄則だが、それを戦

場で実践できる指揮官はそう多くない。指揮官の意志や知性だけで成り立つ話ではない。最小限の指示ですべてを呑み込み、指揮官の望むように戦場を運動することが可能な部隊があって始めて成立する話だからだ。そんなもの、一朝一夕で編成できるものではない。その意味で、まったく、「歩兵部隊」としては、ほれぼれするほど完成された男達だった。

だが、「機械化歩兵部隊」としては、また話は別になる。

少佐はぼちぼち頃合いと見て、銃撃の合間に手榴弾をひとつ放った。

信管を短く切った手榴弾は、着地する前に空中で炸裂　しかし、ぶち撒けられた金属スラグのほとんどは木立の幹に突き刺さり、敵に損害は与えていない。

もつとも、それは投げた本人も重々承知の上だ。遮蔽物の多いこんな場所では、手榴弾の類は効果が薄い　だが、はったりには充分。

少佐は小さく唇を舐めると、再び身を翻して走り出した。

## 5（後書き）

開かれる戦端　少佐の「戦争」とフェリアの「戦争」。  
引き続き、第6話に続きます。

最初の一発から間を置いて、やがて叩き付けるような一斉射撃の音。そして殷々<sup>いんいん</sup>と木霊する砲声。……。

すべて少佐が去った方角から聞こえてきた。

何が起こっているのかしら……？

「『戦争』をしてくる」と言っ、少佐はフェリアを置いて去った。何なのだ、いったい。どうして、どいつもこいつも、男達は皆、「戦争」に行きたがるのか。

あの男もこのまま帰ってこないのだろうか　かつて婚約者だったあの彼と同じように。

「……………」

疲れてるのか、思考がだんだん混濁してきている。あの男と彼と一緒にするだなんて。

あの男と彼とは違う。あんな戦争好きな軍人が死のうが生きようが、私には関係ない。

でも、私は「戦争」に征く彼を見送ってしまった。為す術もなく、ただ見送ってしまった。

「それでいいのです」と侍女のテレサは言ってくれたけど。

「殿方の出征は名誉なことなのです。姫様は婚約者として笑顔で見送りなさらねばなりません」

「婚約者」として……？

また「立場」だ。ここでも「立場」なのね。私は自分の「立場」をきちんと理解して、正しく振舞わなければならない。それが「王女」の務め。ええ、そうね。ちゃんと判ってるわ、テレサ。

だから、私は彼が「戦争」に征くのをこうして見送って

「……………」

フェリアはふと顔を上げた。

私は彼が「戦争」に征くのを見送った。

でも、「戦争」って何？ 私は「戦争」の何を知っているのだろう？

勇ましい男達の闘技場。名誉と栄光を得る場。きらびやかな勲章を誇らしげに胸に飾る將軍達。閱兵式の式典で、整然と行進する兵士達の隊列。……。

本当にそうなのか？

三人の息子を戦場で喪い、妻もまた心労で亡くしたコープ少将生まれ育った国土を戦場に叩き込み、焼き尽くさねば収まらない彼の心の傷。

そして、あの 帝国 の軍人。

嘲笑うように世界を語る、虚無。飄々と皮肉な冗談を口にしながら、死線を軽やかに越えて気にも留めない。狂気と見分けのつかない危険な行動を繰り返し、冷酷に敵を殺戮し続けるその姿。それと部下の事を語る柔らかな表情。

並の人間なら、すぐにも弾けてばらばらに吹き飛んでしまいそうなその矛盾を、何か巨大な力で強引にその身ひとつに押し込んでいるような。その力が「戦争」なのか。

彼も「戦争」から帰ってきていれば、あの男のような人間になっていたのだろうか。

だが、彼は帰ってこなかった。自分の下へは、決して戻ってこなかった。

「戦争」って、何なの……？

もう一度、胸の裡で呟いてみる。

再び、遠くから銃声が聴こえる。

「行かなくちゃ……」

フェリアは凭れた木の幹から身体を起こした。

行って確かめなくては。そこに「戦争」が在るといふのなら。私がただ為す術もなく男達を見送った、その「戦争」が在るといふのなら。

フェリアはおぼつかない足取りで、「戦争」に向かって歩き出し



た。

木立の合間をひたすら走り廻りながら、少佐は第1山岳混成小隊の歩兵部隊へわずかつづ出血を強いていた。

走りにくい足許の雪を物ともせず、獣のように木々の隙間を駆け廻る。追撃の手が緩んだと見るや即座に逆襲し、敵の態勢が整いそうと見るや素早くひいて距離を取る。銃を撃ち、手榴弾を放り、時に軍刀<sup>サーベル</sup>を抜いて白刃を振るう。一時も休むことなく動き廻り、歩兵部隊の神経を引っ掻き廻し続ける。

雪に加えて、急な斜面の上、しかも人数に勝る敵は何度もこちらを包囲しようと試みてくる。その都度、敵の動きを読んで、包囲が閉じる直前に擦り抜けるといふのを何度も繰り返しているのだから、想像を絶する体力と集中力だった。

それでも、近接戦闘<sup>CQB</sup>にだけは持ち込まれないように注意していた。ひとりやふたりの敵を斃せても、その内の誰かに身体を掴まれてしまえば、すぐに周り中から押さえこまれてしまう。

すべては走り続け、闘い続ける己の運動力に掛かっていた。

「……いや、まったく、士官学校時代の鬼教官殿様々だな」

軽口を叩きつつ、そうは言ってもさすがに息が荒くなってきた。

ぼちぼちこちらの「仕掛け」に引き摺りこまないと、こっちの体力が持たない。

実際に、歩兵部隊の動きをこちらの狙った方角に誘導する事に成功しつつある。加えて、後方の山岳戦車とも距離が開いている。たったひとりを追い詰めるのに戦車なんか不要、とも思ってたくれれば御の字なんだがな、さて。

走りながら弾倉<sup>マガジン</sup>を入れ換え、手近な木の幹の陰に滑り込むと、自動小銃を構えて振り返り。視界の片隅に、斜面の上からこちらを見下ろす女の姿を認め、硬直する。

フェアア王女!?

「バカ野郎！ 何でこんなところに　！？」

悪態をすべて言い切る前に、敵の銃撃が集中する。その内の一発が手許を掠め、少佐は思わず自動小銃を取り落とす。

「しまった！」

さらに着弾が集中する。雪を蹴る音が背後に廻り込もうとしている。銃を拾っている暇はない。

「くそ！」そのまま銃を捨てて、走り出す。

「じつとしてられないのか、あの姫様は！」

腰のホルスターから拳銃を抜き放つと、スライド遊底を引いてハンマー撃鉄を起こす。倒木の背後に飛び込んで発砲　その場で瞬く間に弾倉マガジン半分を空にすると、弾かれたようにまた走り出す。

「いいぞ、もうちよつとだ。付いてこい！」

都合よく、フェリアとはちょうど反対の方角に兵達を吊り上げることができた。後は「仕掛け」の蓋を閉じるだけで

銃弾が肩を掠め、肉を抉って飛び去る。

「くっ！」

アドレナリンで神経が麻痺しているおかげで、すぐに痛みはこない。だが、時間の問題だ。出血も無視するには激しい。早めに止血が必要だろう。肺にも冷たい空気が流れ込んで、炎と化して暴れ廻る。それよりも、さすがに足がいい加減、限界だ。膝が笑い始めている　畜生、もう少しもて、この野郎！

開けた疎開部をまっすぐに突っ切って、節くれた太い根が絡み合う木々の根元に頭から飛び込む。

その背後から、いよいよ追い詰めたばかりに兵士達が疎開部に殺到してきた。

少佐は右腕の裾を引いて、金属の腕を露出させると、あらかじめ敷設してあった足許のケーブルを手首のジャックに突っ込んだ。

その直後、疎開部の背後で、仕掛けられた十数発の指向性地雷がブロードソードマイン一斉に起爆する。

高性能爆薬の爆風に乗った鉄球が地雷一発につきプール一面分、ベアリング

前方の空間を薙ぎ払うようにぶち撒けられた。至近距離にいた兵士の人体が一瞬にして肉片と化し、断ち切られた手足が遠くまで跳ね飛んでゆく。

ブロードソードマイン  
指向性地雷は、ちょうど歩兵部隊の後ろ半分を押し包むように巧妙に配置されており、結果、歩兵部隊の約半数がこれでいきなり殲滅されることとなった。

一方、難を逃れた前半分、十数名の兵士達の大部分は、後方の味方に何が起こったのかとつさに理解できず、その場で固まって動きを止めた。それでも勘の良い何人かが、開けた疎開部に密集して立ち尽くす愚を即座に悟り、左右の木立に逃げ込もうとし、そこに仕掛けられた地雷に引っかけ、吹き飛ばされた。

血塗れになって投げ出される仲間の姿を見て、萎縮した残りの兵士達が疎開部の真ん中で本能的に円陣を組む。その様子を横目で眺めながら、少佐は指向性地雷ブロードソードマインに接続するケーブルを引き抜いて、もう一本のケーブルに繋ぎ直す。

シャンパンの栓を抜くような気の抜けた発射音が疎開部の周囲で立て続けに鳴り響き、複数の迫撃砲弾が兵士たちの頭上に襲いかかった。

先行して呐喊する歩兵部隊に山岳戦車が追い付いたのは、それからほどなくのことだった。時間にして五分と経ってない。離れたと言っても、その程度だったが、たったそれだけの間に歩兵部隊は壊滅していた。

疎開部に飛び込んだ山岳戦車は、かつて歩兵部隊の兵士達だった赤黒い残骸の前で当惑するように停車した。

ブロードソードマイン  
その間に戦車の側面に廻った少佐は、指向性地雷などと一緒にあらはじめこの場に用意させた対戦車ロケット砲を手に取り、弾頭から安全ピンを抜いた。この寒さでバッテリーが凍らないよう、アルミ・コーティングの保温シートで包んでおいたものだ。発射装置の

パイロットランプがきちんと点灯していることを確認すると、細長い照準器を立ち上げて、そこに山岳戦車の姿を捉える。

こちらの存在に気付いたのか、戦車の砲塔がゆっくりこちらを向く。

「残念。君等は筋は悪くなかったが、すべてにおいてワンテンポ遅かった」

少佐は対戦車ロケット砲の発射ボタンを押し込んだ。

背後に盛大な後方爆炎を放って、発射筒から弾頭の膨らんだ成型炸薬弾が滑りだす。弾頭が吸い込まれるように山岳戦車へと襲い掛かり、側面装甲を喰い破って高温の熱噴流を車内に流し込む。瞬時に乗員の身体が焼き尽くされ、次いで砲塔に収められた弾薬に火が廻った。

爆轟とともに砲塔が跳ね上がり、車体の各所から炎が噴きあがる。既に薄暮から夜へと移ろいつつある辺りを、攔座した山岳戦車の炎が赤く照らし出す。

結局のところ、彼等の敗因は、自分達が戦車を中心とする「機動歩兵小隊」であることをきちんと理解できていなかったことに尽きる。「機動歩兵小隊」の歩兵は、何があるかと戦車のそばから離れてはならなかったのだ。

空の発射筒を足許に落すと、少佐は炎上する戦車に背を向けて振り返った。

そこに立ち尽くすフェリアの存在に気付いたのは、その時だった。

## 6（後書き）

少佐VS第1山岳混成小隊の「戦争」とその決着

さて、自分の作品の場合、どんなお話を書いても基本となるテーマとして、「自分を取り戻す」というのがあります。

もうちよつと具体的に言えば、「自分の人生を、自分のものとして主体的に生きること」です。

ただそこは社会人の読者の方なら身に染みてお判りでしょうけど、そうそう簡単にできることじゃない。自分を取り捲く社会との関係の中で、意に沿わない生き方を強いられたり、この作品のフェアリア王女のように心を閉ざして周囲の状況に流されたりしながら、まあ、それでも大概の人々はどこかで「これが本当の自分だ」と思えるような小さな何かを心の支えにして日々を生きています。それは「家族」や「恋人」や、あるいは「仕事」や「趣味」や、ひとそれぞれの自分自身で見つけた「何か」です。

でも、それを見つけ損なったり、失ったり、手に入れることができないと絶望したりする人もいます。

というか、現実に満足できているキャラなんて、別にわざわざ物語の中に引つ張り込んでやる必要はないわけで、物語の駆動力となるのは、得てしてこうした「あらかじめ失われた人々」となります。このお話では、フェアリア王女がまさにそうした役割を持ったキャラです。

こういう構造の話ばかり書いているのは、自分が「克己」をテーマとすることの多い「冒険小説」を小説の範としているからか、それとも作者である自分の現実の人生を反映しているのか、どちらがより真実に近いかは、読者の皆さんのご想像にお任せすべきでしょう。

いずれにせよ、そのキャラがそのキャラなりに「自分自身」を取り戻す物語の方が自分にとって書きやすいし、またそういう「物語」を読みたいと自分でも感じています。

だから、まあ、これまでも、これから自分はこのお話ばかり書いてゆくでしょうね。

それでも、なるべく手を替え品を替え、読者の皆さんを飽きさせない手練手管は尽くすつもりでありますので、懲りずに今後もよろしく願いますm(・・・)m

次回は少佐の「戦争」を目の当たりにしたフェリアの決意のお話です。

更新は来週新年1月1日(日)の予定です。  
ではまた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1130z/>

---

棺のクロエ1.5 花嫁強奪

2011年12月25日14時11分発行